

地域支え合い情報

2019年6月20日発行
本体300円+税

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



笑顔あふれる自宅でのお茶のみ風景（宮城県多賀城市 / 詳しくは2頁へ）

特集

お互いさまは茶の間から

毎日が宝物。昼食づくりから
暮らしのお手伝いまで一緒に楽しく！²
あだっちゃん家（宮城県多賀城市）

お茶のみとなにげないおしゃべりが
思いやりの気持ちをつなぐ⁵
川村てるよさん自宅サロン（宮城県色麻町）

専門家に聞く地域づくりのヒント⁷
関西学院大学人間福祉学部 助教 平尾昌也さん

まじわる災害公営住宅⁴⁵ 8
あおい地区（宮城県東松島市）

東北の元気⁷⁶ 9
石巻市渡波ほほえみ生活学校（宮城県石巻市）

まじわる災害公営住宅⁴⁶ 10
ボランティアサークル“ぜんしん”（岩手県陸前高田市）

どこでもサロン²³ 11
母ちゃん工房（山形県朝日町）

被災経験地からのレポート¹²
倉敷発 つながり合う真備の住民たち

読み切り連載リレー◎復興期のコミュニティづくりのヒント¹³
東北工業大学 工学部 教授 石井敏さん

支援員インタビュー² 14
小野恵子さん（宮城県気仙沼市）

地域支え合い情報読者アンケート結果報告¹⁵

宮城県サポートセンター支援事務所の活動日記² 16

お互いさまは茶の間から

お茶のみ仲間は、「お互いさま」の気持ちでつながっています。もの忘れが心配な人に声をかける。身体が不自由な人を気遣う。移動手段がない人と車で乗り合わせる。準備や片づけを行う。それに、もし、特別なことができなくても、お茶のみにまざること、よろこんでくれる人がいます。長年民生・児童委員などを務めて地域の人に気を配ってきた人が、自身も歳を重ねて若い人たちから気を配ってもらったり、「お互いさま」は、地域を循環する関係でもあるようです。



あだっちゃん家でいつものお茶のみ仲間と笑顔が弾む。「気の合う人らで楽しくやっています」と足立勝子さん（左から3人目）

毎日が宝物。昼食づくりから暮らしのお手伝いまで一緒に楽しく!

あだっちゃん家（宮城県多賀城市）

多賀城市の「あだっちゃん家」こと足立勝子さんの自宅には、隣近所と昔なじみの友人が毎週一回集まる。昼食づくりをともし、食卓を囲み、お茶の話を楽しんでいく。それ以外の日も、お茶のみ仲間が毎日のように家に入り出す。お裾分けをもってきたり、車で送り迎えしたり、留守番をしたり。80歳の年齢で身体に少し不



自由のある足立さんは、ひとり暮らしでも、住み慣れた地域で仲間と支え合い、生きいきと日々をすごしている。

お茶のみの参加者は足立さんを含めて6人。藤川喜栄さんと佐藤理子さん、佐藤洋子さんの3人は、足立さんが若い頃公務員住宅に住んでいた時代からのつき合いだ。福島や秋田、東京、金沢と出身地の違う4人が、多賀城市の同じ住宅に同居した縁で親しくなり、そこを出て別々の地区に移ったあとも、時折足立さんの自宅に集まっては、お茶のみをしていた。



足立さんのお隣の鈴木恵子さんは、参加者最年少の60歳代。離れて住む参加者を車で迎えに行くなどして活躍している。足立さんとの関係が深まったのは、2011年の東日本大震災がきっかけだった。震災時、鈴木さんをはじめとした近隣住民約10人が、高台にある足立さんの家に避難し、そこから頻繁に交流するようになった。

そうして数年前から、あだっちゃん家に毎週一回必ず集まり、昼食もつくるようになった。向かいに住む菅原君枝さんは、一年前にご主人を亡くしてから一時体調がおもわしくなく、不安を感じていたところ、足立さんに誘われてお茶のみにまざるようになり、「いつも楽しい。待ち遠しい」と元気を取り戻している。

みんなで料理と食事

毎週の昼食づくりは午前10時30分頃から始まる。社員食堂で働いた経験のある藤川さんが、調理担当のリーダーとして、献立や食材を事前に準備し、周囲に手順を伝える。一緒につくって食べる昼食に、「おいしいね」「やさしい味」とみんな満足。そのままお茶のみ話をして、夕方頃まで盛りあがる。「ふれあっていると楽しい」「笑うこと



冗談も飛び交う和気あいあいとした昼食づくり。「お互い気を遣わないで楽しくやっています」と藤川さん（左端）

でストレス発散になる」と口々に語る。

時にはそろってお出かけもする。外でランチをし、カラオケで懐メロを歌う。桜の季節にはお花見をした。

そうして過ごすうち、一時期よくなかった足立さんの体調は、ずいぶん回復した。「人と話すことによって、元気が出てくる。よくなるのが目に見えて、私たちもうれしい」と鈴木さんたちもよろこぶ。

違いを認め合うこと

ここのよさは、人の悪口を言わないことだという。言いたいことがあるれば面と向かって言うが、違う意見に対しては言わない。「それぞれ考えは違うけれど、認め合っている」（鈴木さ



この日のメニューは、チキン南蛮のタルタルソース和えにエビとアボカドのヨーグルトサラダ、スープ餃子。卵焼きとところてんの差し入れも

ん）からだ。

年齢が60歳代から80歳代と幅広いのもよさだ。「同じ年代だけだったら、いざごさもあると思う。（こちらは）長く生きているぶん、若い人よりたぶん少しは何かを知っていたりして、頼ってもらえる。若い人は車に乗せてくれたり、別の面で助けてくれる」（足立さん）。世代が違うことで、お互いさまの関係が自然に築けているという。

足立さんが民生・児童委員をしていた頃から親交のある、多賀城市東部地域包括支援センターの沼倉重紀子さん（右端）も時折顔を出して、参加者の介護申請を代行してくれたり、話題に出た近所の気になる人を訪問してくれる



お互いさまが広がる

かつて民生・児童委員や地区の役員を務め、地域で活躍してきた足立さん。その時の経験や出会いも続いている。お互いさまの関係性は、世代と人をこえて地域

を巡っている面もあるのかもしれない。

現在は自宅をこうして憩いの場として開き、冷蔵庫や調理器具まで提供する。「足立さん、こういう人柄だから、うち使っていていいよって言うってくれて。（集まって料理もできて）助かりますね」（藤川さん）、「自宅を提供してくれることってなかなかない」（菅原さん）とみんなもうれしく感じている。一人ひとりが料理をつくったり、お茶を淹れたり、差し入れたり、相手のために無理なくできることを持ち寄って、温かな空間をつくりあげている。

「お互いさま」は日常にも広がっている。隣近所の鈴木さんや菅原さんたちは毎日のように足立さんの家に入ったりし、その様子を気にかかけ、見守りのようになっっている。鈴木さんは車で足立さんや菅

原さんの買い物ものや通院に付き添い、役所の書類記入も手伝う。足立さんの体調が悪い時に、藤川さんが洗髪を手伝ったこともある。

こうしたサポートに「本当に助かっているの」と足立さんや菅原さんは感謝する。それに対して、「結果的にそうなっているだけで、助けるというより、ただ明るいおつき合いを楽しくやっている感じですよ。何かをしてあげると、お互いに楽しめているんです」と鈴木さんは話す。足立さんも、「気心の知れた人だから、そこまで気を遣わなくてもお願いできる」と言う。

自然な支え合いに包まれた足立さんたちの暮らしぶりは、年を重ねても、住み慣れた地域で安心して楽しく暮らすためのヒントを教えてくれている。

ポイント /

- お茶のみ仲間との日常的なつながりから、見守りや車で送迎、病院同行、書類代筆なども自然に生まれている。友人同士だから、そこまで気を遣わなくてもお願いできるし、する人も一緒に楽しめて、それを特別意識しない。
- 心地よい場をつくるヒントは、多世代で集うこと、違う意見を認め合うこと、心のうちを語り合うこと、人の悪口は言わないこと。
- 自分の弱いところも含めてオープンな人は、周囲もサポートしやすい。自分もできることをして、お互いさまの関係にあると、頼む時も遠慮せずにいられる。



川村てるよさん（左から5人目）を囲んで笑い声が絶えない仲間たち

お茶のみとなにげないおしゃべりが 思いやりの気持ちをつなぐ

川村てるよさん 自宅サロン（宮城県色麻町）

ライター：熊谷 智美

色麻町の川村てるよさんのお宅に伺った。手入れが行き届いた庭にはチューリップが咲いていた。その庭にまで響く笑い声は、お茶のみに集まっていた仲間たち。いつでも誰かが立ち寄ってお茶を飲み、おしゃべりをしていてという。

川村てるよさんは2019年1月に90歳の誕生日のお祝いを色麻町長から直々に受け取った。早くに夫を亡くし、70歳まで釜飯屋に勤め、その後も新聞配達などをして働いてきた。現在でも自宅の畑仕事に精を出す。季節にもよるが午前5時半には起床して身支度を整え、その日訪れる人たちのためにお料理をつくったり、畑仕事をして朝の時間を過ごす。そうこうしていると、川村さん宅に誰かしら訪れる。一人で暮らす川村さんに気を配って、「カーテンが開いているか気になって」と足を運ぶのは近所の早坂かち子さん。



川村さんお手製の料理や差し入れなどが並ぶ

お隣の高橋吾子さんもよく訪れて声をかける。こうして名前をあげるときりがないほど、川村さんの家には近所の人が自然と足を向ける。一緒にお茶のみを楽しむのは、定年までお勤めをしたり、家族の世話などに忙しくしてきて、ようやくゆっくり過ごす時間を持つようになる仲間たちだ。集う曜日や時間が決まっているわけでも、会の名前があるわけでもない。「毎日、誰かしら集まってお茶っこしている」と、集まっている人たちは笑う。月1回程度顔を出す人もいれば、毎日のように訪れる人も。川村さんが外出しているという、「今日は病院だろうから間もなく帰っ

てくるはず」と、庭先で待っている人もいるそうだ。

生活の知恵が生んだ 互助の仕組み

「頼母子^{たのもし}」という仕組みがある。メンバーが定額のお金を出し合い、くじを引いて、当たった人が集まったお金を受け取るという仕組みだ。古くは、たとえば屋根の修理など、急にお金が必要になったときの工面の方法であり、互助の仕組みだったという。

川村さんたちは、10人のグループで頼母子をしており、メンバーで毎年のように温泉旅行に出か



近所の人たちはお互い気にかけている



けていたという。メンバーが5人になった現在も、毎月続いている。以前は金銭的な互助の意味合いが強いのだったようだが、いまでは仲良しのメンバーが近況を報告し合う楽しみの場になっている。

気軽に立ち寄れる 心地よい居場所

川村さんの家に集うのは近所の仲間たち、頼母子のメンバーなどさまざまだ。「てるよさんは男

の人も女の人も関係なく、若くてもお年寄りでも、誰でも受け入れるから、ここにはいろんな人が集まるの」とは、ご近所の虎岩英子さん。取材の日は、川村さんを含め12人の女性がお茶のみをしていたが、男性が混じることも珍しくないそうだ。

お茶のみ仲間が「誰かれとスカスカと寄ってくると笑う。スカスカとは「順次に」という意味の方言で、誰か来ているかなあと思っただけに見に来て、誰かが来ていればまざってお茶を飲み、誰もいなければ川村さんに声をかけて、結局お茶を飲んでおしゃべりする。そうやって訪れる人のために、川村さんはいつも煮物や漬けものなどを用意しておく。それが川村てるよさんのサロンだ。

気持ちを寄せ合い 支え合う関係

集まる仲間のなかに

は、足を痛めている人、いくらか物忘れがある人など、年齢相応の困難を持つている人もいる。仲間たちは足が痛い人にはさりげなく座椅子を勧め、物忘れが心配な人にはそれとなく声をかける。ケアをする人と受ける人というくりはなく、お互いが思いやりの気持ちを持ったつき合いをしているようだ。

川村さん自身は耳が遠いので、電話が鳴ると集まっている誰かが電話に出る。おしゃべりの声が聞こえにくいので、近くに座った人が大きな声でサポートすることもあ。お茶のみの準備も片づけも、川村さんに負



川村てるよさんの自宅

「誰も悪口を言わない居心地のよい場所」「話をして笑うからみんな若い」と集まった人たちは話す。そして「てるよさんには長生きしてもらわない」とみんな口々に言い合う。一方川村さんは、「90歳まで生きてきたなかにはいろんなことがあったけど、みんなに助けられてやってきた」とほほ笑む。もともと地域の人たちはみんな知り合いという土地柄だ。その土地柄のよい特性をつむいで、お互いが気を配り、必要があれば支える。川村さんを囲んで、みんな大きな声でおしゃべりをして、大きな笑い声が響く。それが地域を明るくする一因となっているのかも知れない。

ポイント

- 誰かしら集まれる人と毎日のように順次お茶のみ。
- 家主の川村てるよさんは料理でもてなし、地域の昔なじみの人が寄り合う場として自宅を提供。訪れる人もひとり暮らしの彼女を気にかけて、暮らしのお手伝いする。
- お茶のみが、参加者同士、体調面などを気にかけて合い、支え合い、地域を明るくする場になる。

専門家に聞く地域づくりのヒント

困りごとで困らない ～自宅に集まったその先に 見えてきたもの～

何気ないことに何かある

みんな何か特別なことをするためにやってくるのではなく、お茶を飲んだり、持ち寄ったものを食べたり、一緒につくって食べたりと、どれも日常生活のなかで自然に行われている「何気ないこと」を、足立さんと川村さんお二人の自宅という場所に集まって、おしゃべりしながら行っている。つまり、日常生活のなかにある「ありふれたこと」が、みんなで集まることによってよろこびを生み、楽しみになっている。楽しみがそこにあり続けるからこそ、連続性と継続性のあるつながりになっているのではないか。特別な場所であると同時に、生活のなかに溶け込んでいる場所でもあり、「みんなと一緒にお茶のみしたい！」という気持ちが集まった温かい場となっている。

困りごとで困らない支え合い

集う人びとがお互いにできることを提供し合うことで、困りごとで困らないような支え合いが行われている。どちらの事例においても、家主は高齢であることや身体に不自由があることで、日常生活のなかに困りごとがある。しかし、お茶をしに来ていた人たちが、

関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科
助教

平尾 昌也

(ひらお・まさや)さん



2010年3月に関西学院大学人間福祉研究科博士課程前期課程を修了。同年4月に宝塚市でNPO法人こむの事業所を創業。障害者総合支援法に基づく障害者就労継続支援A型事業を基盤としつつ、ソーシャル・ファームの考え方に立ち、働く場面でさまざまな困難を抱える人たちの働く場をスタート。2018年から現職。現在、宝塚市ボランティアセンター(助成金配分委員会、運営委員会)、川西市社会福祉審議会、大阪市北区地域福祉計画策定などに参画している。

その困りごとに気がついたり、話を聞いて、自分たちのできることを協力することで、困らない環境をつくり出している。自宅に集まっているからこそ、日常生活上でのリアルな困りごとに気づくことができ、支え合うことで地域での生活を続けることができているのではないか。

みんなの家になっていく

自宅を開放してみんなの集い場にするということ考えてみる。この状況を言い換えれば、自分の暮らしのど真んなかである自宅に、いろんな人が不定期に訪ねてくるということだ。つまり、「暮らしの姿(生きる姿)のありのままをさらけ出している」ということだ。しかも、いつ誰がやってくるのかわからないということ。「今日は誰がくるかな?」と、お二人ともに楽しんでいるようにも感じられた。集う人たちも、そのことに心地よさを感じているように思えた。日々のかかわりが積み重なった、昔からのなじみの顔が織りなす、みんなの居場所。どちらの事例も「一人の家」が「みんなの家」になっているように思えた。



まじわる!

集団移転 & 災害公営住宅

第45回

地区住民のつながりを深め ボランティアや訪れる人との 交流を楽しむイベントを開催

あおい地区（宮城県東松島市）

ライター・熊谷智美



毎年5月5日の子どもの日が近づくと、東松島市あおい地区の各家に小さな青い鯉のぼりが飾られる。この鯉のぼりには子どもたちの健やかな成長を願うとともに、東日本大震災の犠牲者を追悼する思いが込められており、「青いこいのぼりと春のフラワーフェスティバル」の取り組みの一つとなっている。

今年のフラワーフェスティバルは4月7日に開催され、創作太鼓の演奏やご当地アイドルのステージなどで盛りあがった。なかでも恒例の1000人によるのり巻きづくりは大好評だった。一人ひとりがのりの上にご飯を均等に広げ、卵焼きやかんぴょうなどの具を並べる。それを全員で息をあわせ慎重に巻いて36メートルののり巻ができあがり。完成後は切り分けて見物客やボランティアにもふるまわれた。1本ののり巻きを分け合って食べることで、訪れた人たちの会話も弾んでいた。



イベント当日に風に泳ぐ、青い鯉のぼりの爽景

あおい地区は約580世帯1700人が暮らす東日本大震災の集団移転地区で、フラワーフェスティバルは「まちびらき」の翌年の2017年から毎年行われている。今年も昨年まで大曲浜で行われていた「青い鯉のぼりプロジェクト」の1000匹を超える鯉のぼりが、地区内の東矢本中央公園に掲げられた。イベントは1日のみの開催だが、小さな青い鯉のぼりの掲揚や、「青い鯉のぼりプロジェクト」の大きな青い鯉のぼりが勇壮に舞う姿も含め、あおい地区の春のまつりとなっている。



ステージで披露された、創作太鼓の演奏

地区住民だけでなく、美里町の太鼓集団、チューリップを贈ってくれたJR東日本ひがし労働高崎地方本部の皆さん、のり巻きづくりをサポートする石巻西高校や東北文化学園大学の学生たちなど、多くの人がかわっている。イベントや鯉のぼりを楽しみに、近隣地区の住民のほか遠方から訪れる人もいる。フラワーフェスティバルは、地区の住民同士の交流の場であるとともに、地域外の人や団体とのつながりを深めるイベントでもあるようだ。



75回目

市民リレー

東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

サロンに出づらい人の 自宅で交流

◎石巻市渡波ほほえみ生活学校（宮城県石巻市）



訪問先の家で、おしゃべりをしながら和やかに過ごす



月2回、活動内容について定例会議で話し合う



この日は皆で折り紙のアジサイを作成

「サロンなど、住民同士の交流の場になかなか出て来ない人とながらるには、どうしたら」。宮城県石巻市の渡波地区には、そんな気がかりから始まったお茶会がある。住民団体の「石巻市渡波ほほえみ生活学校」が、外出しづらい人などの自宅で開催している訪問式のサロンだ。「サロンいぐつちや」と名づけられ、同団体メンバーや近隣の住民が集まる。

2016年秋にこのお茶会を始め、いつも3〜5人程度が参加する。およそ2時間、お茶や菓子などを囲んで談笑したり、小物づくりなどをやる。1人あたりの参加費は100円で、訪問する先の住民には、家の居間などを使わせてもらうお礼に、毎回500円の会場代を同団体から渡す。開催頻度は、およそ1か月に1回。年間、計10回ほど行っている。

訪問先は、出かけることが身体的にたいへんな人や、大人数で集まるのが苦手な人などさまざまだ。中途失聴により、しゃべることができても、音は聞けないという人には、メン

バーが紙とペン、身振り、情報や思いを伝える。周囲とコミュニケーションをとる人が寄り添うことで、明るく、生きいきとした時間を過ごすことができる。

同地区の沿岸部は、津波被害を受けた東日本大震災以降、住宅が点在し、日常的ななかわり合いが減少。お茶会参加者を自宅に招くことが、「一緒に飲み食いできてうれしい」「おもてなしをするのも楽しい」などというよろこびにつながり、おふるまいをしたり、自らほかの人を誘ったり、ほかの家で開かれるお茶会への参加を希望する人も出る。また、未だに自宅を修繕しきれず、人を招くのに気が引けるという場合は、メンバーの自宅を会場にすることもある。

当初は個人宅でサロンを開くことに緊張と不安があったが、代表の津田幸子さんやほかのメンバーは、「なにより、相手の立場で考えることがたいせつ」と口を揃える。勇気を出して踏み込んだ、かけがえのない、つながりづくりだ。

清

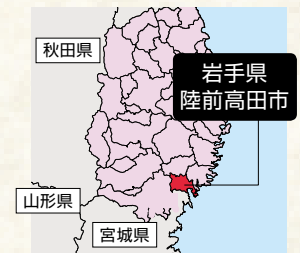
まじわる！ 集団移転& 災害公営住宅

第46回

新たな地域でも笑顔と 元気が集まるしくみづくり

ボランティアサークル「ぜんしん」（岩手県陸前高田市）

ライター：元持幸子



2019年4月より、佐藤善治郎さん（70歳）と有志メンバーが、ボランティアサークル「ぜんしん」を立ちあげ、岩手県陸前高田市内の災害公営住宅集会所や公民館で住民交流をサ

ポートする活動を始めた。佐藤さんらは、15年（19年3月まで、陸前高田市復興支援連絡会の支援員として、地域サロンの立ちあげや運営、被災者の見守り活動を行っ

てきた。19年3月、市内の応急仮設住宅から全戸が退去する

目的が立ち、同協議会は活動終了となった。市内11か所の災害公営住宅

895戸はすべて完成。集団高台移転は29

団地が完成し、残す2団地は19年度中に引き渡し完了予定となっている。

これまでの支援員としての経験も生かした「ぜんしん」の活動は、住民同士のつながりをたいせつにし、仲間と笑い合うなかで交流できる機会をつくる。今後の地域課題への対応を模索しながらの活動でもある。特に、課題になっているのが、住民の高齢化が進むなかで自主的なサロン運営が難しくなること、住民が新たな生活環境に慣れるのに時間がかかって外出の機会が少なくなることだ。

現在は、月に1〜2回のペースで、防災集団移転促進事業により整備された地区の公民館や災害公営住宅集会所7か所でお茶会を開催している。体力づくりの一環のノルディックウォーキングや健康づくりの体操などは、男性参加者にも好評だ。

ノルディックウォーキングは約30分間、集会所の周辺の地域を自分のペースで歩く。まち歩きも兼ねていて、季節の変化や会話を楽しみ、地区の様子を知ることができ。道端で出会う人たちとの会話も弾んでいる。参加者の女性は、「高台に移ってきたはじめの頃は周辺の状況も変わ

り、なじみの人たちと離れ、出かけることがおっくうに感じることもありました」と、引越してきた2年前を振り返る。定期的なお茶会が開催されることは、地域住民にとって外出する楽しみのひとつにもなっている。

「ぜんしん」メンバーが訪問する日には、参加者が集会所の鍵を開け、手づくりの菓子や漬けものなどを持ち寄り、お茶の準備をしている。なじみの顔ぶれが集まると、笑い声のあふれるお茶会が始まる。



お茶会の前後の簡単な体操は、かけ声も笑い声も軽やかに

当初は佐藤さんが支援員としてサロンの立ちあげをサポートしていたが、現在は、住民が役割を担い、楽しく継続できる形を模索しながら参加している。「ぜんしん」というグループ名のように、新たな地域でも笑顔で元気に、前向きになれるよう、市内各地の集会所での活動を続けたい」。佐藤さんは今後の活動への思いをそう語った。

現在は、月に1〜2回のペースで、防災集団移転促進事業により整備された地区の公民館や災害公営住宅集会所7か所でお茶会を開催している。体力づくりの一環のノルディックウォーキングや健康づくりの体操などは、男性参加者にも好評だ。

ノルディックウォーキングは約30分間、集会所の周辺の地域を自分のペースで歩く。まち歩きも兼ねていて、季節の変化や会話を楽しみ、地区の様子を知ることができ。道端で出会う人たちとの会話も弾んでいる。参加者の女性は、「高台に移ってきたはじめの頃は周辺の状況も変わ

り、なじみの人たちと離れ、出かけることがおっくうに感じることもありました」と、引越してきた2年前を振り返る。定期的なお茶会が開催されることは、地域住民にとって外出する楽しみのひとつにもなっている。

「ぜんしん」メンバーが訪問する日には、参加者が集会所の鍵を開け、手づくりの菓子や漬けものなどを持ち寄り、お茶の準備をしている。なじみの顔ぶれが集まると、笑い声のあふれるお茶会が始まる。

当初は佐藤さんが支援員としてサロンの立ちあげをサポートしていたが、現在は、住民が役割を担い、楽しく継続できる形を模索しながら参加している。「ぜんしん」というグループ名のように、新たな地域でも笑顔で元気に、前向きになれるよう、市内各地の集会所での活動を続けたい」。佐藤さんは今後の活動への思いをそう語った。

どごいでもサロ

第23回

自然なつながりと支え合いを生み出す



菓子づくりで人も地域も元気に

母ちゃん工房（山形県朝日町）



リンゴの栽培が盛んな山形県

朝日町（人口6811人、高齢化率42.1%※2019年4月1日時点）。道の駅あさひまち

『りんごの森』の人気商品の一つに、地元産リンゴを使ったアップルパイがある。サクサクとした香ばしいパイ生地、自然な甘みと酸味の効いたリンゴのフィリング

（具材）がたっぷり。水曜と土・日曜の週3回、売り場に焼きたてが並ぶ。これを目当てに県外からも買いたい客が訪れる。数

時間でも売りが切れることも珍しくない。パイをつくっているのは、主に果樹農家の女性たちで組織する食品加工グループ「母ちゃん工房」。リンゴを生地に練り込んだパウンドケーキ、地元の餅米を使ったゆべし、春限定の草餅なども製造している。

「町の活性化とか、お金を稼ぐとか、そういうことより、お菓子づくりを楽しみながら友だちの輪を広げ、社会に参加することが私たちの目的」と説明するのは、代表の堀幸子さん（72歳）。

メンバーがマイペースで働けるように、2007年のグループ結

成以降、あえて法人化せず、任意団体として活動してきた。

「自分たちの時間を有効に使って、仲間と一緒に作業したり、休憩時間にお茶飲みや食事をしてたりするのは、健康にとってもいいと思います」（堀さん）

メンバーは60〜70歳代の15人。親を在宅で介護している人も少なくない。「マコに來るとストレス解消になって、介護のときにやさしく接することができる」と話す人も。おいしい菓子が人

によるこはれ、若干の収入を得、仲間と交流できて、心身の健康増進にもなる。

活動拠点は、道の駅に隣接する食品加工施設で、交替制のシフトを組み作業に従事。

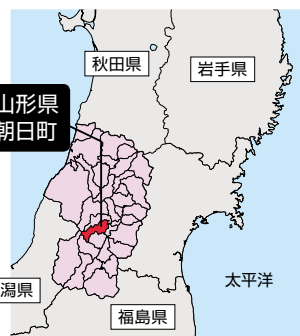
昼の休憩は、施設内の事務所で一緒にとる。テーブルにはメンバーが持ち寄った自慢の手料理や漬けものが並び、おしゃべりに花が咲く。「ここで料理を教え合って、それぞれ家で作って

みるんです。だから（それを食べられる）家族にとってもありがたい」と言って笑うのは、副代表の小野田鶴子さん（78歳）。

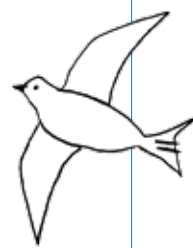
小野さんは、グループで最年長の一人。「80を過ぎても自分

できることをして、みんなと一緒に活動を続けたい。だから健康に気をつけたい」と気を引き締める。

「母ちゃん」たちの菓子づくりは、人も地域も元気にする。木



倉敷発 つながり合う真備の住民たち



岡山県倉敷市真備地区は、平成30年7月豪雨災害により4分の1以上が浸水する大きな被害を受けた。家屋の全半壊・一部損壊が8千棟を超え、床上・床下浸水も8千棟を超えるなか、「このまちで暮らしたい」という思いから、これまでの地域でのつながりや文化を生かした支え合いの萌芽が生まれている。

気心知れた地域の居場所づくり

末政川が決壊して浸水した有井地区は、奇跡的に残った下有井公民館に畳を入れ、ボランティアセンター機能と住民の集いの場として活用。バラバラに避難している住民が再会し、気心知れたおしゃべりを楽しむ「有井女子会」を復活させた。その立役者である浅野静

子さんは、地元で民生・児童委員や地区社協の会長として活動。自らも被災したが、市外のボランティアとの橋渡しや協働、地域で気になる人と支援をつなぐ役割を果たし、地区内にある応急仮設住宅の支援にもあたってきた。「もともと顔の見える関係の地域だった。みんなの帰りを待つ場所でありたいと、公民館で女子会が復活し、男性も集まるようになった。堤防の拡幅工事のため、公民館はゆくゆく立ち退きになるが、これからも地域の居場所づくりに取り組んでいきたい」と浅野さんは話す。

アイデアを出し合い、交流

350世帯が被災した呉妹地区では、被災2週間後に地区社協役員が集

まり、今後について協議。「情報がない、物資が不足している、ご近所さんと話せる場所がない」という声に対応する

ため、支援物資の配布や相談処、訪問型サロン、炊き出しを企画。実施を重ね、「被災していない人が参加しにくい」「みなし仮設の人にも案内をしたい」という声が出て、新たに企画した12月の交流会は、約400人の参加があり盛況となった。また、呉妹の住民を救助してくれた人たちに感謝の気持ちを伝えたいと、岡山県備中県民局に働きかけ、感謝状を贈呈してもらえることに。自身も被災した会長の森本常男さんは、「みんなでアイデアを出して取り組んできた。今回、独自に被災状況について実態調査を行ったが、これを機会に家庭や地域で避難

場所や避難するタイミングについて話し合うことができれば」と話す。

これらの取り組みは、2019年3月17日に倉敷市内で開かれた「第5回支え合いのまちづくりフォーラム」(主催…倉敷市社会福祉協議会、倉敷市高齢者活躍推進地域づくりネットワーク会議)で実践

発表された。コーディネーターを務めた一般社団法人Wellbe Design理事長の篠原辰二さんは、「たくさんの方の地域への愛着や特技をかけ合わせ、地域の不安を小さくする活動ばかり。自分たちの地域は自分たちでつくる好例。日頃のつながりこそが、次への備えとなる」と評価した。



フォーラムで参加者に配布された、被災地発支え合い活動事例集「豪雨ニモマケズ」

人と人をつなげる ～コミュニティの醸成に向けて

いしい・さとし

東北大学卒業、東京大学で博士号取得。専門は建築計画、特に高齢者や障がい者の介護・支援施設、認知症のための住環境整備に関する研究が専門。1997年から2年半と2012年に8か月間、留学生・研究員としてフィンランドに滞在して研究を実践。震災後は高齢者施設の被災実態、福祉仮設住宅の実態、共助型災害公営住宅（相馬市）などでの調査研究などにかかわる。

コミュニティとは、「つくる」ものではなく「育てる」もの。一朝一夕にできるものではなく、時間をかけて醸成されていくものです。人と人が複層的・重層的につながることによって形成されていきます。人がつながり、それがネットワーク化して面的拡がりを持つことで、いわゆる地域コミュニティができあがってきます。ですから、コミュニティの形成を期待するのであれば、とにかく人と人を「つなぐ」ことがたいせつです。ただし、人と人とのつながり方は一つではありません。だからこそ多様な活動やつながりを誘発するような機会や場が求められることとなります。LSAや各地域の支援員、民生・児童委員の役割と活躍が大きく期待される場所です。

つなげるきっかけを「見つけて」「育てる」

「つなぐ」という言葉

を使いましたが、誰かが意識的につなげなくてはならない難しさがあるのが現代です。さまざまな関係性が断ち切られてしまった方が入居する災害公営住宅団地ではなおさらです。かつては子どもが学校やお祭りなどをとおして人をつなぎ、地域コミュニティをつくりあげる媒介（原動力）になっていました。コミュニティが醸成されていく土壌や背景がありました。しかし、いまは違います。災害公営住宅には高齢者をはじめ自ら動き、つながりをつくることのできない人々が多くいます。媒介となる第三者がいないとつながることができない状況があります。だからこそ、改めてLSAや各地域の支援員、民生委員・児童委員の役割が期待されることとなります。

きっかけとなる「種（たね）」を見つけて、「拾い」「蒔く」、そして「育てる」ことでコミュニティの形が見えてきます。お茶

会、食事会、健康イベント、趣味活動などは手段です。また、一方的に第三者から与えられた関係性だけでは継続しませんし、育っていきません。参加者一人ひとりがコミュニティの一員であると感じて、それぞれが役割を持つ存在になることを促すことがとても重要なこととなります。「育てる」主語が誰かということでもありますが、あくまでコミュニティのメンバー自身でなければなりません。その意味でも少しずつ媒介者の姿が小さくなっていく（黒子になっていく）ようになれば成功です。しかし、それには時間もかかるでしょうし、もしかしたらずっとかわり続けないと維持できないのがこれからの時代のコミュニティです。終わりの（見え）ないかわりがLSAや各地域の支援員、民生委員・児童委員には求められているのかもしれない。

**これからの日本が抱える
共通の課題解決のために**

さて、震災以前からコミュニティの喪失は言われていました。喪失の要因としては、「長屋」「縁側」のような住民が自由に交流できる公共空間の喪失、行事や祭りなど地域の社交性の喪失、他者とのつながる「煩わしさ」の忌避とそれにもなう共助の喪失などが要因とされています。いまの時代、これからの時代にあった形でのコミュニティのあり方を模索していかなくてはならないでしょう。被災地、特に災害公営住宅でのコミュニティ醸成の取り組みは、これからの日本が抱える共通の課題解決のための実践的な取り組みモデルとも言えます。目の前にいる人と人をつなぐことの積み重ねの先にコミュニティがあります。地域のなかで人と人との間にあって奔走されている皆さんの今後に大いに期待しています。



支援員インタビュー

2

気仙沼市は、2015年度から、市内8か所に生活援助員（LSA）を設置。委託を受けた6法人が、災害公営住宅などの住民の安否確認や見守り、声がけ、生活相談などにあたっている。災害公営住宅「南郷住宅」一階の「西地区高齢者相談室」には、平日午前9時から午後5時まで（業務実施時間）、気仙沼市社会福祉協議会のLSAが常駐。同住宅のほか、西地区の災害公営住宅や防災集団移転団地、仮設住宅などを担当する。（聞き手・田中義則）

— 支援員になったきっかけは？

小野 気仙沼市出身で、震災前は介護老人保健施設で働いていましたが、震災の影響で退職を余儀なくされました。新聞の求人広告を見て、（募集要件の）介護福祉士資格を生かしたいと思ひ、応募しました。

— 支援員としての活動はいつから？

小野 南郷住宅の入居開始は15年1月ですが、14年11月から研修を受け、（仮設住宅を支援する）ボランティアセンターの職員と一緒に仮設住宅への訪問、お茶会などに参加しておりました。顔をつないでいただいたおかげで、入居開始後も住民の方からすんなりと受け入れていただきました。

— LSAの体制と主な役割は？

小野 現在4人体制です。介護福祉士や保育士の有資格者、市の相談室に勤務していた人がいます。65歳以上の高齢者を主な対象に見守り訪問を行っています。

社会福祉法人気仙沼市社会福祉協議会
西地区高齢者相談室 室長・LSA

小野 恵子さん



ます。月1回が基本ですが、体調面が気になる方については頻度を増やし、臨機応変な対応をしています。

— 見守りの結果をどう共有しているか？

小野 毎朝のミーティングのほか、訪問後にも情報共有し、全員が対応できる形にしています。気になる方は、市の高齢介護課に連絡し、専門職へつなぐなどの対応を行っています。また、南郷住宅の自治会長とも情報共有をしております。2か月毎に6法人のLSA、県社協、地域包括支援センターが集まり、高齢介護課の主催により生活援助員ケースカンファレンスを開催し、意見交換をしています。

— 心がけていることは？

小野 ひとりで抱え込まないことです。気になる人がいれば、その都度専門職に相談しています。難しいですが、どこまで踏み込むか線引きを考え、住民同士のつながりを大事にかかわっています。

— 南郷住宅入居から4年経った変化は？

小野 高齢の方が多く、体調や精神面で不調を訴える方も増えています。そうした方が地域から取り残されないように、どのようなお手伝いをすればよいか考えています。新聞受けに新聞が溜まっているとか、体調をくずした人がいると教えてくれる方もおり、住民同士でも気にかけてくださっています。当初は、住宅の不具合などの建物に関する相談が多かったのですが、最近は家賃算定などの書類に関する相談が多くなってきました。生活音などの問題はあっても住民同士で相手を理解し受け入れるなど、住民間のいい関係ができていると感じます。

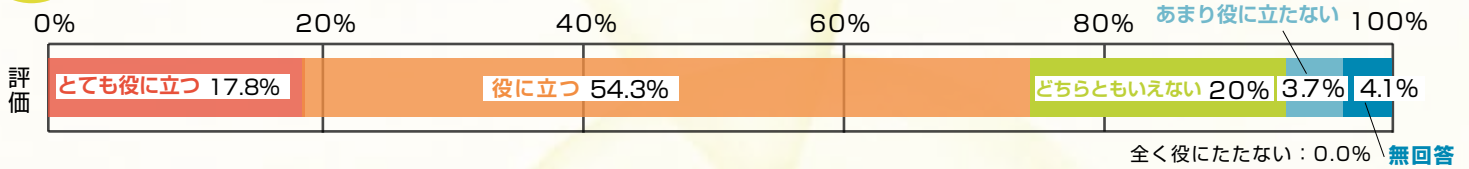


南郷住宅一階にある西地区高齢者相談室



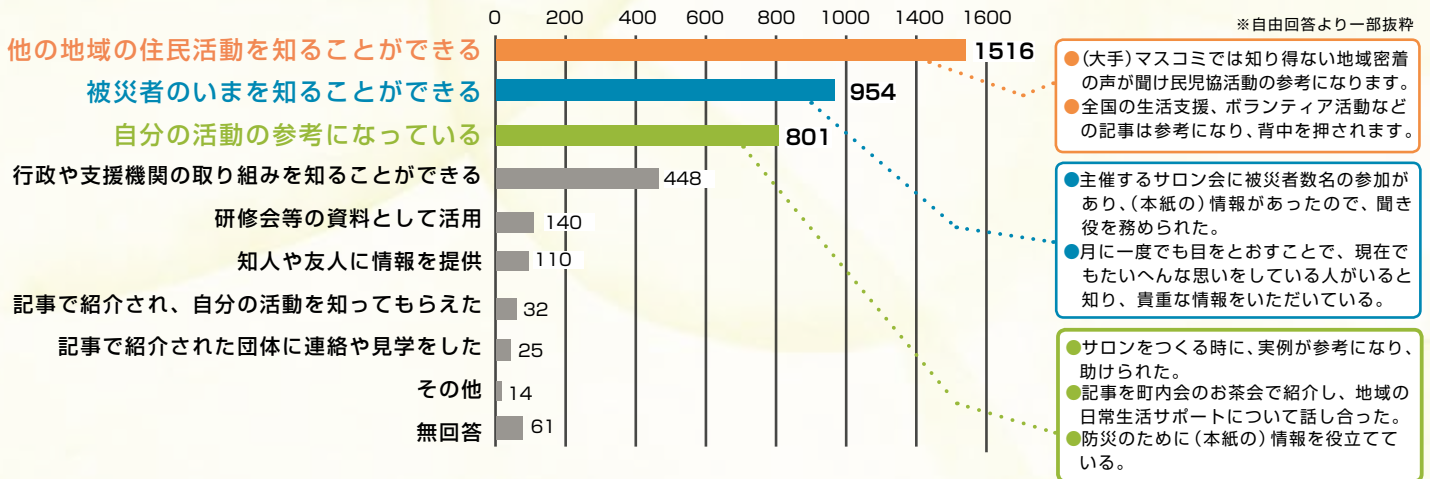
4月のリニューアルにあたり、本紙編集委員会では、主な読者である宮城県35市町村の民生・児童委員 4,669人のほか、県・市町村社会福祉協議会や地域包括支援センター、自治体など 1,371か所を対象に、本紙へのご意見・ご感想を伺うアンケート調査を実施しました（回収率約35%）。その概要を報告します。

Q1 「本紙がどの程度役に立っていますか？」

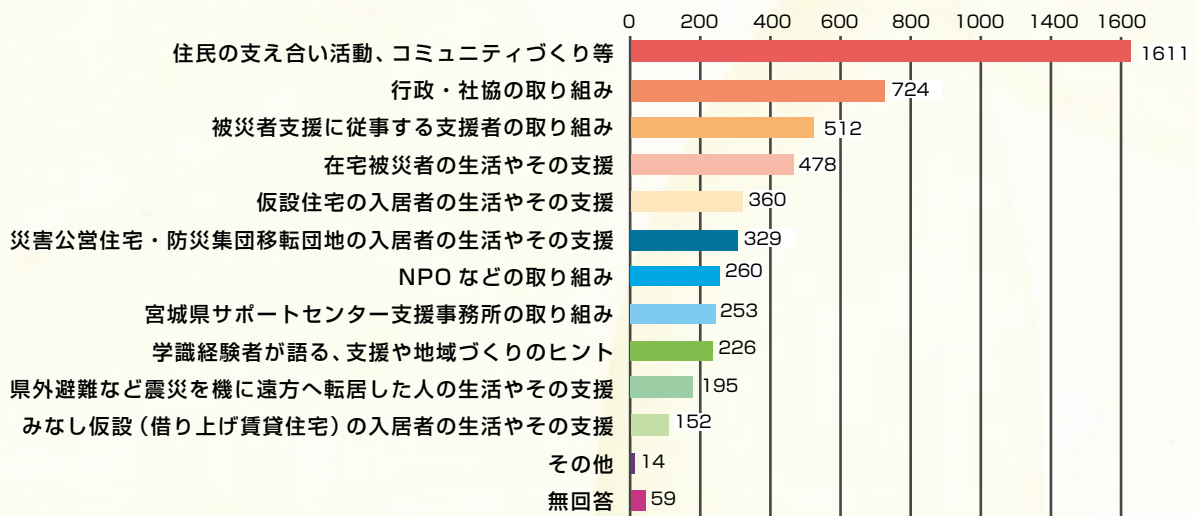


「とても役に立つ」「役に立つ」と回答した人は7割を超えました。「あまり役に立たない」と回答した人からは、「活字が多すぎ、読みづらい。見やすいように工夫が必要」（自由回答）という声がありました。こちらは、80号から読みやすくなるようデザインを一部変更しております。「成功例だけでなく、もう少し困っていることを取りあげてもよいのでは」という意見もありました。これまでも団体の活動経緯のなかでご紹介してきましたが、さらに意識して取りあげたいと思います。

Q2 「本紙が何に役立っていますか？」（複数回答）



Q3 「どのような内容に関心がありますか？」（複数回答）



上位項目は、より重点的に取りあげていきます。自由回答で多かった、「地域の子ども食堂を取りあげてほしい」というご要望にお応えして、次号では子ども食堂に関連する特集を予定しています。「在宅被災者の記事をもっと読みたい」「これからの活動の担い手のことを載せてほしい」などのご意見もいただきました。

ご回答いただいた皆さまありがとうございました。アンケートを今後の参考に、よりよい紙面づくりに努めて参ります。

ふるさとからも 離れなくてはならなかった人たち ～広域避難とは～

東日本大震災は、県内で避難生活を送る方々のほかに、他県へ広域避難する方が多く生まれた災害でした。2019年4月9日現在も、約4万8千人もの方々が、全国47都道府県、997市区町村に避難をしています（復興庁）。宮城県からは最大時9,204人が県外へ避難されました（2012年4月・復興庁）。

見知らぬ土地での避難生活は8年をすぎました。この避難生活は被災直後の衣食住の確保からは脱したものの、平常化した日常生活のなかには新たな生活課題が生まれ、一見、平穏を取り戻したかのように見えても、段階を進んでいくなかで、一人ひとり多くの課題を抱えながら続いています。

リーダーの東北学院大学地域共生推進機構の本間照雄特任教授と、宮城県サポートセンター支援事務所とで、広域避難者とその支援団体の声を聞き書きの手法でまとめた、平成30年度の復興庁「心の復興」事業「ふるさとを離れた被災者の葛藤と苦悩に寄り添う」事業報告書『ふるさとを離れるということ 広域避難者と支援者の葛藤と苦悩』ができあがりました。

広域避難者支援において、「避難者の定義」というワードを耳にするようになりました。被害の程度が大きいから避難者なのか、被害が小さければ避難者ではないのか。広域避難者支援に携わるなかで、それは定義づけするものなのかと、いまだに頭のなかで漠然としています。

報告書に登場してくれた支援者は、そのようなことを考えることなく、目の前の困っている人を受け止めてくれました。いま、被災地の被災者と元々そこに暮らしていた住民との交流やさまざまな場所から集まって来た被災者同士の交流が被災地の災害公営住宅などでも課題となっていますが、それと同様の状況は広域避難者の受け入れ当初からあり、試行錯誤を繰り返してきているのだと思います。

この報告書は、今後、広域避難者を受け入れるときの備えとなり、いま、被災地でおこっている課題の解決に向けたヒントもちりばめられています。そして、人と人とのつながりや支え合いということを、改めて考えるきっかけになるのではないかと思います。（松本 桂子）

☆次号予告 特集「地域食堂」

令和元年度◎宮城県地域福祉コーディネーター研修事業

初級研修

【仙台会場】7月1日（月）宮城県管工事会館
【石巻会場】7月3日（水）石巻市総合福祉会館 みなと荘

◎講師 池田 昌弘（全国コミュニティライフサポートセンター 理事長）

令和元年度◎宮城県生活支援コーディネーター養成研修事業

初級研修

【利府会場】6月24日（月）ヘア・バル利府
【丸森会場】7月4日（木）館矢間まちづくりセンター
【加美会場】7月8日（月）宮崎公民館

◎講師 池田 昌弘（全国コミュニティライフサポートセンター 理事長）

地域包括支援センター職員と介護支援専門員研修

【仙台会場】8月20日（火）仙都會館

◎講師 折腹 実己子（仙台市地域包括支援センター連絡協議会 会長）
大坂 純（東北こども福祉専門学院 副学院長）
高橋 誠一（東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授）
志水 田鶴子（仙台白百合女子大学 人間学部 准教授）
池田 昌弘（全国コミュニティライフサポートセンター 理事長）

令和元年度◎宮城県被災者支援従事者研修事業

支援に関わるための基礎研修

【石巻会場】7月23日（火）～24日（水）河北総合センタービッグバン
【仙台会場】8月1日（木）～2日（金）エスポールみやぎ

◎講師 永坂 美晴（兵庫県 明石市社会福祉協議会 地域総合支援センター
地域支え合い推進担当係長）
岩城 和志（兵庫県 淡路市社会福祉協議会 事務局次長）

地域支え合いの発見の仕方

【仙台会場】8月19日（月）仙都會館

◎講師 大坂 純（東北こども福祉専門学院 副学院長）
池田 昌弘（全国コミュニティライフサポートセンター 理事長）
木村 利浩（全国コミュニティライフサポートセンター
出版・開発グループ 地域支え合い推進プロジェクト 開発主査）

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joho@clc-japan.com